
零崎路識の人間嗜好

呪人形

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

零崎路識の人間嗜好

【Nコード】

N6967L

【作者名】

呪人形

【あらすじ】

世界は4つにわかれていた。

その最もどす黒い部分である暴力の世界には、魑魅魍魎にも負けず劣らない化物が棲息している。

その中でも異端を地でいく殺人鬼集団において、なお異質とされた零崎路識の物語である。

第1話

繁華街から少し離れた路地裏で、彼はただゆっくり黙々と煙草の煙をもくもくとふかせて佇んでいた。見るものが見れば判る着漬したかのようによれよれになった高級ブランド物のスーツを着込み、少し浅黒い肌でスキンヘッドの青年は顔に紅く塗られた筋隈の有無に関わらず見た目はヤクザであり、苛立った表情も相まって話しかける事すらないだろう。

日が傾き斜陽のさす路地裏はペンキをぶちまけたかのように赤く、ただただ単色で美しくすらあったが、それを見て感傷に浸れるのはこの場を支配する圧倒的で倒錯的な臭いを知らないからである。

路地裏を支配するそれは、ひと呼吸するだけで心肺を犯し尽くし気分を害する事は間違いないであろう程の 死臭だった。

「ん…… 面倒だなクソッ」

右手を振って血ぶりをすれば、右手に握られたそれは生を得た化物か何かのように揺らめき、大気に存在する目に見えない音の壁を容易く切り裂きパァンと軽やかな声で啼いた。

そう、彼が持っているのは所謂鞭という武器だった。右手で握りしめる柄には指を守るように湾曲した鉄板が存在し、本来ならありえないがまるで接近戦すら想定しているかのように、槍でいう石突と呼ぶべきかという鞭の柄の部分には刃渡り5cmほどの直刀が備え付けられていた。

だが、鞭としては全体的に黒塗りでそこまでゴツい物ではなく全長は4mにも満たない長さでしかないが、柄から1m程度離れた時点でそれは1本の鞭ではなく幾筋にも別れた細かな紐状になっている。

それはどう鼻屑目に見ても鞭らしく打撃である。 現実的に見れ

ば先端に細い紐が房になってついているとなると、それは既に鞭としての重量を失い九尾の猫等の拷問道具とも謳われる武器になる事はなく、どんなに振り回しても手元の太い部分に当たれば痛いだろうが、先端になればなるほど当たっても痛みを感じないはずである。しかしながら、それはただの常識という一般論でしかなく、現実とは露ほども交わらない夢想論でしかない。

ならば現実とはどうなのかと言えば、それが鞭たりえていないのはまごうことなき事実であるが、それにはあまりにも表現が足りなすぎるだろう。

今現在だが路地裏に居るのは男女合わせて5人だと思われる。

1人の男は面倒臭そうに煙草を口にくわえて煙をふかし、残りの男女4人は体を自身の血に沈められ手足のどれかを喪って倒れている。だが、勘違いしないで欲しい。これは短いながらも太さがあり、鞭として成り立っている部分を使って削ぎ飛ばしたわけじゃない。

そもそも、倒れた男女の周囲に各々の獲物だったと思われる物の破片や残骸が転がり、それは綺麗な切断面をさらけ出して無惨に散らばっている。そして、血をしたたらせるように四角くダイス状に切り分けられた何かがあちこちに散らばっていた。

落ちている四角いそれらには布が貼り付いているものもあり、この血の海に浮かぶ島こそが彼らの喪われた手足だという事が理解できた。

路地裏に唯一佇んでいる男の右手には血ぶりしている鞭があり、その足元には細切れにされた人間が落ちているならば答えはおのずと分かるはずだ。血の海に沈んでいる男女を解体したのは常人では人に傷すらつけられない鞭であり、ならばこの男は常人ではないということだ。

当然彼は曰く付きの人物であり、所謂常人とは程遠く既に別の生物と言っている。いや、むしろ彼は人間ではなく鬼だった。

彼は『零崎一賊』と呼ばれる人を殺す鬼であり、その身は鬼におちた人ならざる集団に所属する鬼だった。その鬼 零崎路識みちしきか

らしてみれば、自身の主義と殺人行為に最も適していたのは自身の二つ名にもなる鞭の『^{ダイスメーカー}生肉工場』だった。

「……………ううっ」

足元に転がる1人から呻き声があがるが、それを特に驚かず煙草を静にふかし続けている。彼は殺人鬼でありながら不可解な主義があつた。

《障害に値しない輩は殺さない》

呼吸と等しく人間を殺す殺人鬼でありながら、殺しに関する大きな誓約を負う唯一の後に曲識も誓約を負うが殺人鬼であつた。だからこそ、もしもここに居るのが路識ではなく他の零崎だったなら生きている事に驚いたかもしれないが、元々殺すつもりがなかった路識にしてみれば敵が生きているのは当然の事だった。

今となつては血に溺れたのか呻き声をあげているのは2人しかおらず、しかも呻き声をあげる内の1人は体を痙攣させて喉から絞り出される空気が声帯を震わせているだけで、自らの意志で呻き声を出していないので3人は死にかけていると言つても過言ではない。

いや、黙っていた2人は呼吸や瞬きをしておらず、既に死んでいるのだらう。

死体を見ても彼はも思うところが無いのか、誓約を破つたばかりにしては冷静そうに見えるが、正確に言えば路識は自身に課した誓約を破つてはいない。そこに落ちている死体はダイスメーカーによつて殺された訳ではなく、ダイスメーカーで手足を細切れにされた傷からの出血多量で死んだのだ。路識が直接殺したわけではなく、これはただ死んだだけでありただの犬死にでしかない。

乱暴に言つてしまえば、相手に怪我を負わせてしまい10年後にその傷から何かを拗らせて相手が死んでしまった場合、その傷をつけた人間による殺しになるだらうか。路識からしてみれば、殺すつもりのない攻撃でショック死や失血死をしたならば、それは例に

あげた10年というスパンが短くなっただけにすぎないのだ。

だからこれは詭弁でも言い訳でもなく、路識にとっては殺人行為に入らないのである。

「んにしても、もう何度目だこりゃ？」

最近になってからというもの、あっちもこっちも表も政治も財力も裏も総てが総てお祭り騒ぎの殺しあいであり、全員が全員手元に伏せた立場である敵味方というカードを時々刻々と交換し、今では誰が敵で誰が味方で誰が中立なのかすら誰にも　カードを持つ本人さえ　わかりはしない。

相対する相手が敵か否かは明朗で、立ち塞がるなら殺して犯して食らいつくすだけである。その後でゆっくりと安全に相手からカードを奪い取り、そこで敵か否かを判断するのが簡単だ。

だが、そうはいかないのが零崎路識という殺人鬼の業である。

あくまでも徹頭徹尾《障害に値しない輩は殺さない》という誓約を貫く路識にとっては、自らは手を出さず全てが全て奇襲を主にした遭遇戦であり、他の家賊や殺し名と違い未然に敵の芽を摘むような手段は一切講じていない。

あくまで障害になったら殺すのであって、完全に受け身にならざるを得ないのが路識にとってこんな不可解な時期には歯痒いところでもあった。

それに、路識を含めた5人全員が生きている間に尋問は済ませたが、答えは相変わらずといていい内容でしかなかった。その時のやりとりを要約すればいつも通りのもので、何で俺を狙ったのか聞けば「零崎^{かたしき}片識が死んだせいで、お前が俺達を障害として狙っている」と情報が入った」と答え、誰がそんなバカな事を言ったのか聞けば「俺達を殺しに来て返り討ちにあつた奴等が言っていた」と都合5度目になる解答を得られていた。

本来ならばこんな情報は手に入らないだろう。　なんとと言っても、

この手の裏の人間はとにかく口が堅いので情報なんてものは簡単に吐き出さない上に、零崎一賊を相手に情報を吐き出すという事は一族郎党老若男女の区別なく皆殺しが決定するのだが、その点として路識は他の零崎一賊とは立場や主義が大きく違っていた。

障害になつたら一族郎党皆殺しは決定するが、逆に言つてしまえば自分が生きてるならば皆殺しは回避したという事であり、だからと言つてペラペラと情報を吐き出すわけではないが他の零崎一賊よりは容易に情報を聞き出せていたのだった。

「んむ…… どうにも、俺の噂を誰かが独り歩きさせてるみたいだなあ」

生きるか死ぬかは倒れた本人に任せ、俺は煙草の火を消して携帯灰皿に放り込むと路地裏を巡り巡つて目的地へとサンシャイン通りへと出て、そのまま目的地である池袋サンシャイン60跡地へ向かう。

サンシャイン通りを奥へ向かい、東急ハングの横を抜けてサンシャイン60があつた場所に着いた。そこには跡地が見えないようにされた幕が周囲に張られ、それを取り囲むように野次馬と放送や警察の関係者で人が溢れていた。

昨夜未明に起きたとされるその事件は、あらゆる意味で日本全国を震撼させていた。ニュースや新聞では連日引つ張りだこであるゆる情報が出回っているが、その見出しはおおよそこうである

『サンシャイン60倒壊事件』

表では様々な推測や憶測が論じられ、それもガス爆発や建物の老朽化といった在り来たりな推測から、それこそ爆弾テロから宇宙人の仕業といった過激な推測まで世間を賑わせており、裏では零崎一賊の5名ほどがサンシャイン60倒壊とともに殺されたという噂に震撼していたのだった。

そして、その噂が根も葉もないものであれば路識もここには来な

かったが、それが事実である為に感傷というわけではないが此処に来ていた。

「……下手人は天吹の分家だろうが、狙いが俺だけじゃなく家賊だったから俺の障害足り得ないな」

殺された家賊を悼むわけでもなく、ただただ淡々と口にする周囲の誰にも気付かれる事なく、崩れた墓標ともいえるサンシャイン60に背を向けて人混みに消えて行った。

物語はこの大戦争が始まり、零崎一賊が本格的に巻き込まれる前の冬へと遡る。

零崎路識を含む6人の小さな家賊は、ここ東京の池袋を根城にして細々と活動していた。家として小さなオフィスビルのテナントを間借りし、架空の企業としてそこに住んでいたのだ。

これはここの家賊の兄である零崎片識が都合してきたもので、片識は零崎ながらも絵鏡の誰かをパトロンにしていると専らの噂で、本人はやりわりと否定はしているがオフィスを借りた架空の企業が絵鏡の介入によって存在していたり、池袋近隣で誰かが零崎をしてもそこが隠蔽をしている形跡があった。

そんな零崎片識を兄に持つ路識の物語は、ここから始まったのだ。

第2話

ここは池袋にある小さなオフィスビル。

そのビルの5階にあるテナントに、その企業は入っていた。ビルの案内に書かれた名前は《加賀宮絵画仲介サービス》と書かれていて、テナントの入って玄関までは企業然とした造りになっているが、玄関から一步オフィスに入ってしまったそばがオフィスだとは誰も思わないような、内装は魔改造され尽くした住宅だった。

オフィス然とした玄関を入って直ぐに靴を脱ぐ為の玄関が用意され、そこから先には更に畳が敷かれて中央には炬燵が置かれ、座布団があちこちに散乱した部屋のどこがオフィスだろうか？ その部屋で炬燵に入りつつ煙草片手にお茶を啜る室内なのにサングラスを着用し、よれよれの背広を着た男が居れば誰が見ても企業の入ったテナントだとは間違えないだろう。

だが、炬燵で寛ぐ男　路識は玄関から帰って来た金髪の日付きが悪い男を見て眉間に皺を寄せていた。　玄関から帰って来た男は金髪を整髪剤でこれでもかというほど立たせ、高そうなネックレスを首から下げてブランド品かはわからないがやたらとフカフカした毛皮のコートを羽織った　本人には悪いが　ホストかチンピラのような男だった。

「やあ、路識。　ただいま」

その外見からは初めて会った者は確実に面をくらうだろう優しいげな笑顔と、外見を裏切る事で更に印象付ける優しいげなソプラノボイスで金髪の男　零崎片識は路識へと口を開いた。

それに対する路識の目は非常に冷めたもので、お茶を口に軽く含ませてから「おかえり」と答えるだけだった。

だがそんな弟である路識に思う所があるのか、片識は疲れたよう

に小さくため息を吐いたが、それを払拭するような笑顔を振りまいていた。

「久しぶりの家長会議の出席だったから、俺もちよつと疲れちゃったよねえ……でも、京都に向いて他の零崎一賊に会うのも楽しいねえ！路識の事とか京都に居る音楽家の曲識君について、ちよつとばかしお喋りして年甲斐もなくはいじゃったよねえ」

そう言つて手に提げていた紙袋から箱を取り出すと、つまらなそうな路識に「京都のお土産なんだけど、ペナントと八つ橋のどっちがいい？」と聞いてきたので、路識は妙な書体で大きく「京都に参上」と書かれたセンスの欠片もないペナントから目を反らし、小さく礼を言つて八つ橋を受け取っていた。

「ところで、優識^{やさしき}たちはどうしてるのかねえ？」

「んつと、最近は巷でニュースになるほど零崎をしに行っているようだ、どこに行っているかまでは」

「困ったねえ……こちらら殺人鬼の零崎だけに、殺人を止めるようには言えないからねえ」

腕を組んで心底困つたと言わんばかりに顔を顰め、最近やたらと勤勉に頻繁に激しく緩やかに零崎をしに行く家賊を思い、たださえ長旅に疲れていた片識はため息を吐いていた。

炬燵に潜り黙々と八つ橋の包装を破る路識を尻目に、片識はお土産を路識に渡す事であいた右手で足元に落ちていた週刊誌を拾うと、その表紙には池袋で横行している殺人事件について煽り文句とともに記されていた。

それを見て片識は先程までの柔和な笑顔を消し去り、ありったけ

の苦虫を口に頬張らされた挙げ句に他人に顎を動かされ強制的に咀嚼させられたかのように、あからさまなまでに顔を顰めている。

観光やらもかねて2週間も京都に滞在していたが、ここ1週間ほどで男女合わせて15人も人間が殺人事件に巻き込まれており、単純に1日で2人以上も殺されている。

だが、別にそれは驚くような事じゃない。零崎一賊という殺人鬼集団にとってみれば、それこそそこに人が居るから殺人を犯し疲れたから殺人を止めるようなものであり、最近池袋での殺人ペースが上がっているが、元々京都に出向くまでは片識がパイプを持っている絵鏡家の分家にあたる鏡夜家から『殺しは1週間に1日、2日に抑える』との約束があり、その約束が家賊によって破られた上に鏡夜は殺人の隠蔽から手を引いたとみえた。

ただの政治家やヤクザなら情報が漏れて隠蔽工作に失敗する可能性はあるが、権力を手中に収めた四神一鏡に名を連ねる絵鏡の分家から情報が漏れる筈がなく、だとすれば故意に流したか隠すのを辞めたかの2択しかない。

「……………殺しの約束はみんなでしたと思っただけだねえ」

「んー……………破ってこそ約束の醍醐味云々だそうだ」

「まったく彼等は……………ところで、これを機に路識も殺人をやったりはしなかったのかい？」

「んむ、誓約を貫くべし」

他の零崎一賊にとってみれば狂気としか受け取れない　殺し名に使うべきか悩むが　呪いとも言える殺人への枷を自らに強いており、片識を含めた路識本人以外の零崎一賊はそんな誓約なんてさつさと破棄したうえで、零崎一賊として零崎らしく殺人をおこなっ

て欲しかった。だから片識が京都に出向いた事で緩んだ規律に流され、路識も殺人なんかをしていればよかったのだが……と、そこまで考えてこれ以上短期間に死体が増えなかった事をよしとしてとりあえず路識の意識改革は後回しにする事にする。

意識改革という説法を回避した事を知ってか知らずか当の路識はと言うと、箱から取り出した八つ橋をゆっくりと味わいながらお茶をすすり、そして相変わらずどちらかと言えば嫌煙家である片識には理解できないがだるそうに煙草をふかしていた。余談だが実は片識はこんななりではあるが嫌煙家であり、しかも下戸であったのだった。

「それにしても、北海道に住む焼織^{やきおり}たちはどこかと小競り合いしているらしくて来てないし、京都でも俺達が会議してる宿が1回ばかり襲撃されたりと、タイミングが少しだけ悪かったねえ」

コートをハンガーにかけながら京都に出向いて来た5人の面々を思い出し、最後に会ったのは何年前か思い出せない焼織の顔を思い出して小さくため息を吐く。

「あ、安心してねえ。北海道での仇討ちはあっちの家賊で決着をつけるみたいだから」

「んむ、人殺しはしたくないからいいことだ」

無表情で白々しい事を口にしてしていると自分でも感じてはいたが、それでもそれこそがダイスメーカーである自分らしさと納得し、お茶で八つ橋の甘さを飲み下しつつ煙草の火を灰皿で揉み消した。

零崎一賊の仇討ちは激しいと言わざるを得ない。それこそ仇討ちにかける熱意や情熱といった狂気は他の殺し名から忌み嫌われる要素の1つで、仇の関係者であるなら老若男女問わず鼠1匹逃がさ

ず一賊総出で悉く殺しつくすのが零崎一賊のありかたである。

だが、いくら一賊総出で仇討ちと言っても最初からそうはいかない。そもそも、日本全国に零崎一賊は散らばって根城を確保しており、集まるだけでも一苦勞である上に全員が殺人鬼であるからしてどこかしらで大小いざこざを一賊全てが抱えていた。なので、零崎一賊を敵にまわしたところで最初に出張って来るのは敵対してしまった零崎の家賊だけであり、そこで手に負えず全滅するか要請があつて初めて零崎一賊が総出で仇討ちに参加する事になる。

敵が多すぎる　否、明確な味方が居ない零崎一賊にしてみれば、絶えることのない揉め事や仇討ちはできるかぎり現地の家賊のみで片をつけてほしいのが本音なのである。まあ、それでも一賊としての体裁を重んじるからには、自分の家賊の状況はさておき要請さえあれば渦中どころか火中にさえ飛び込むという面もあるので、だからこそ手紙つてとはいえ焼織は援軍が必要ないと明言していたのだ。

それでも、この事を零崎路識に伝える意味はないと片識の冷めた部分が語りかける。炬燵に潜りお茶を飲む路識は障害にならないならば仇討ちにも参加しそうになく、冷静になればなるほど零崎路識は零崎一賊ではなくただの殺人者なのではないかと考えてしまう。殺人鬼である零崎一賊は殺人を営む鬼であり、殺人という行為に忌憚りも何を感じずに人を殺すのであつて、路識のように殺人に信念というか妙な誓約を立てる者は鬼なのか断言できる自信がなかった。

「とにかく、俺が帰って来たと知ればあいつらもちよつと大人しくなるだろうし、その間になんとか鏡夜の連中に媚を売らないとな……昔の戦争よりは楽だが、立場が変わって役割に折衝が入るのは面倒だな」

疲れきつた片識がソファに座り、既に半分も残っていない路識の八つ橋を見てから冷蔵庫を開き、夕食用の食材すら残っていない

空の冷蔵庫を見て涙を流すのはまた別の話である。

時計は既に22時を回ったことを示しているが、この家ではただに夕食に誰もありつけていない。いや、コンビニ弁当や惣菜ならテーブルに並んでいて、更に言えば先程までは湯気を上げていたが誰も食事を口にしないでいた。

部屋の中には、腕を組んで明らかにキレている片識が立ち塞がっており、キレている片識の前では学ランを着て大人しそうな少年が瓶底メガネを床と平行にするかのように土下座して頭を下げて、壁際にはキレている片識に言い訳をしようとした途端にR15相当の肉塊になった革ジャン姿の男が血塗れで潰れていた。よくよく見れば、ピクピクと動いている所からして肉塊はまだ生きているようだった。

ちなみにそんな状況下であれ、この説教の対象外になっている路識は夕食にこそ片識が怖くて手を出していないが、右手に燻らせた煙草を肴に酒を煽って現状を止めずに我関せずの態度を崩していない。

「よおおお正識^{ただしき}、お前は何してたか言ってくれるか？」

「ひい！ す、すすすみません！」

「質問に答えろよなあ？ 早くしないと、愛の鞭で後頭部を踏み抜いちゃうぞ」

据わった目で薬をきめてるかのような蕩ける笑顔をこぼす片識だが、そんな表情が見えないはずの正識は心底恐ろしいのか顔を蒼白にして震えている。正識は知っていた、あの肉塊 半殺しで

潰された優識は愛の鞭の結果なのだ。

だからこそ、土下座を続ける正識は言葉を選びながら戦々恐々と地雷原と言っても過言ではない片識をかわす為に、自分は優識に巻き込まれたただだと説明を続けていた。

しかし、そんな努力もキレた片識の前では無意味であり、10分後には血塗れになった正識と更に傷を増やした優識、そして今から冷めた夕食を食べ始めた片識だけが部屋に居た。ちなみに路識は悲鳴を肴に夕食まで済ませたのか、既に部屋から去っていたのだった。

第3話

さて、昨晚の痛々しい愛の鞭という名を冠した折檻の成果は、翌日になって全身を包帯に巻かれたミイラ男のような姿をした優識と正識が沈痛な面持ちで　　顔は包帯で見えないが　　朝食をとっていた。

この家で家事に秀でているのは家長である片識と、我が家の長女である緋織ひおりの2人だけである。そしてその緋織はと言えば、相変わらず趣味人として趣味に全力を傾けており、今はたぶん現在の趣味である漫画を読む為に漫画喫茶に住んでいるのだらう。ちなみに緋織は趣味を見つければ全力を傾けるが気紛れですぐに趣味が変わり、以前は盆栽を趣味にしていた家のあちこちには観葉植物代わりに手入れされなくなつた盆栽が飾られ、唯一片識だけが枯らすのも忍びないのか水やりをしていたのだつた。

話が逸れたが片識には不思議な呪い染みたものがあり、和食以外はからつきし作れなかつた。トーストすらまともに作れず、卵焼きもだし巻きのような和食としてなら作れるが、それがオムレツになると何をどうやつたのか尋常ならざる兵器と化していた。しかも、作れる和食と作れないそれ以外の料理との差は片識の心持ちの部分らしく、例えばカレーライスは本人的には和食扱いらしく作る事ができるが、これがインドカレーになると作れなくなる徹底っぷりである。

以前片識がどこだつたか他所に住んでる零崎の中に、何でもカレーだけは上手く作れない呪いにかかつたような輩が居ると聞いたが、零崎には何かしら料理に先天的な呪いでもあるんだらうか？

まあ、片識が作ったので今日の朝食は和食であり、料理は美味いが味噌汁のような汁物を啜ると2人のミイラ男は口に染みるのか、地獄の苦しみを味わいのうち回っている。

だが、そんな2人を無視して路識は食事を続けており、片識はと

言えば自分が帰って来てから緋織と会っていない事に憤慨していた。

「全く全く、緋織ちゃん俺が帰って来たと知ってるのに帰って来ないのかねえ？」

「……そういえば、昨日緋織からメールが来てたんだよね」

そう言っただけはポケットから携帯電話を取り出すと、緋織から来ていたメールを片識に渡していた。それに無関心な路識はさておき、興味津々な優識の為に苦笑しながらも片識はそれを音読し始めた。

「なにに『アタシは漫画を読んで決めた！殺人鬼を辞めてアタシは雀鬼になる！今から牌を買って今すぐ帰るから全員起こして』だってねえ。相変わらず趣味が変わるのが早いというか……いったい何の漫画を読んでたんだろうねえ？」

「えつとよ、そのメールが着いてるのはいつだよ兄貴？」

何か気になったのかミイラ男　優識は片識に聞くと、片識は怪訝そうに「メールが来たのは昨日の23時だねえ」と調べて教えているが、そこまで聞いて路識にも疑問が浮かんできた。

「だからよ、姉貴がどこの漫喫に行ってるのか知らないけどよ、流石に未だに帰ってないのはおかしいだろ？」

そう、さすがに朝の9時になっても帰って来ないのは遅すぎる。遅すぎるのだが、緋織とは気紛れ過ぎる部分があることを全員が理解していた。

「そうなんだけど、緋織ちゃんなら麻雀牌を買いに行く途中で新しい趣味に目覚めた可能性もあるしねえ」

「そうですよ、緋織姉さんにかぎって変な目に遭うはずもありませんし、優識兄さんの気にしすぎですよ」

趨勢は決した。楽観的というか緋織を信頼している片識と正識の2人の言を聞いていれば、最初は不安というか心配気味だった優識も段々と緋織への信頼が増していき、今となつては何故あの緋織を心配してたんだかと悩む始末である。

そんな状況下であれ、こちらも相変わらずながら路識は会話にも緋織にも無関心であり、さつさと食事を済ますとポケットに手をつ込み…… 顰めっ面で空になった煙草の箱を握り潰すと立ち上がる。

「あれ、路識は出掛けるのかねえ？」

「んむ、煙草が切れたからな…… 少しばかり散歩ついでに買ってくる」

そう言つて路識は立ち上がると、シワだらけのスーツの上からコートを羽織るとそれ以上特に何も言うことはなく、さつさと自宅であるオフィスから居なくなっていた。

ここは日本有数の繁華街である池袋。 若者と喧騒は平日休日を問わず溢れており、今は朝の10時になるつかという時間だが休日だけに早くも若者が集まり始めている。

だが、そんな集まりつつある若者の喧騒も、慣れてしまえば小鳥の囀りとなんら変わることはなかった。 要するに、気にしなけ

ればどうということはないということだ。

とりあえずオフィスビルから出た路識は、まるで太陽光が眩しいといわんかのように目を細めると、空を睨むように自宅の対面のビルの屋上から矮小な人間を睥睨する太陽を睨み付けて小さく舌打ちすると、当初の目的を思い出したのか煙草を求めて歩き出した。

近くに置かれた自動販売機でいつも通りセブンスターを買い足すと、面倒臭そうな表情をして1本取り出してくわえるとまさに深呼吸するかのように息を大きく吸い込んで肺に煙をいっぱいまで溜め込むと、溜めた分だけ景気よく煙を吐き出して小さく頷いた。

「んつと、じゃあ軽く散歩とでも洒落込むか」

煙草を吸って上がったテンションは目的すら無いというのに、家を出る際に伝えた通り律儀に散歩をしようと路識に決心させ、目的が無いならばと足は一路映画館に向かっていった。

特に何かが観たいという予定のなかった俺は、まあ大ハズレはないだろうとゴシックホラーの名作である狼男をリメイクし、より映像がリアルになったものを観ていた。

狼男とは太陽の下では純粹に人間としての営みを楽しみ、満月の晩には月光を浴びて人間の倫理や道德といった薄っぺらで無意味な仮面を打ち捨て、ただただ狼としての獣の本性だけをさらけ出し血と肉に飢えた化物。

非力な人間よりも獰猛であり凶悪な熊より力強く、狡猾な狐より更に陰惨であり醜悪な野犬よりなおぞましい化物中の化物。一度現れれば血煙の立たない夜はなく、血に酔い肉に飢えて殺しを楽しむ悪意の塊。

ふむ…… こうやって狼男を言い表してみると、殺し名とどっこ

いな存在だというのが際立つてくるな。この場合、狼男が化物として上等なのか殺し名が人間として下等なのか悩み所だが。

場面はクライマックスまで進み、狼男が人間だった時に恋する女に銀の銃弾を撃ち込まれ、狼男は呪縛から解き放たれ幸せそうに逝くシーンに入ってきたが、それにしてもこの映画館のサプライズ精神は素晴らしいと思う。

映画業界はいま3D映画の発展が著しいが、この映画はそんな絶頂へとひた走る3D映画ではない。しかし、映画が飛び出しては来ないが臨場感だけには力を入れているらしく、先程からこの部屋には大きなスクリーンにも大迫力のサウンドにも負けなくらい血の臭いが充満していた。

臭い自体はだいぶ前から始めていて、映画の登場人物が惨たらしく殺される毎に臭いが濃くなり、今では本当に狼男が居た殺戮の森の中に入ったような感じさえしてしまう。

だが、そんな気分でいられるのも長くはなく、クライマックスが終われば残すはスタッフロールしかなく、それが終わり部屋が明るくなった時にはここに居た数十名の人間は頭部を碎かれて死んでいて、映画を観ていた俺とスクリーンの下に立っている2人の男女以外に生き物は居なくなっていた。

「んー…… 狼男は様式美に溢れてるな」

むせかえりそうなまでに籠った、所謂錆びた鉄の臭いとも銅の臭いとも形容される血の香しい薫りを満喫しながらも、今となっては最後の観客となってしまった俺は椅子に腰掛けながらも静かで広い空間に1人映画を賞賛し拍手をしているが、その音も虚しく空気を震わせるばかりであり共感者はいないようだった。

「貴方は零崎ね」

「『生肉工場』であり『正確精緻』の零崎路識だな」

見た目からすれば兄妹であろう2人は、スクリーンの下で手を繋いで口を開いた。兄はパツと見では高校生といったところで、妹は中学生くらいだろうか？ 今時は早熟らしいから深い所まではわからんがな。

「んむ、俺がダイスメーカーでありパラノイドアンゼムと呼ばれる零崎路識だが、すまないが初対面では？」

「僕は浮舟ららでこの子は妹の朝顔るる」

「私達は勾宮の分家である宿木の子。『死色の赤』に潰された宿木の直系」

そう言って鉄パイプを構える浮舟とH鋼を構える朝顔は、どうにもあの面倒な勾宮の分家であるらしかった。まあ勾宮の分家だろうと『死色の赤』に潰されていようと俺には関係ないが、それでも俺には禁忌ともいえる部分を孕んでいる可能性があるので聞かなければならない事がある。

「んつと、それでお前達は俺を狙って殺しに来たのか？」

「それは自意識過剰よダイスメーカー」

「僕達が目指してるのは宿木家の再建であって、それを成す為には発言力がなければいけない。だからこそその零崎狩りであり、あのビルから最初に出てきたのが『徹底鋼線』でも誰でも零崎なら構わない」

「貴方は私達の前にやって来た憐れな獲物なの」

口上を述べてやたらと殺気立つ2人とは対称的に、路識のやる気はぐんぐん下がって萎んでいく。路識にとって重要なのは敵が強いか弱いかではなく、自分にとっての障害足り得るかが一番の焦点になっており、零崎一賊を狙いに来たと豪語する2人の殺気は路識にとっての起爆剤にはならず、とりあえず腹部に巻き付けてあるダイスメーカーをほどいて軽く構えるのみである。

やる気には天と地ほどの格差があるが、そんなやる気のない路識に対して猛々しくも冷静に構えるのは宿木兄妹。

殺し名の中でも醜悪な群体と侮蔑される零崎一賊に対して手を出すと言うのは本来ならば賢い選択とはいえないが、それでもお家の為にと身を捧げる覚悟でららとるるはそれぞれの武器を構えていた。先程は零崎なら誰でも良かったと言ったが、あれは嘘である。できれば狩るなら零崎路識がよかった。

理由としては路識の武名がそれほどないからで、そもそもそんな路識すら殺せないようならば零崎狩りなんて話にならない。そして、それより何より路識は障害以外は殺さないという零崎一賊としてありえない主義を掲げているだけに、もし自身が名乗りを上げて路識に破れたとしても誰も困らないからだ。

もしも、こんな事を他の零崎に仕掛けて負けた場合、宿木の生き残りすら零崎一賊に滅殺されかねないのだから……。

第4話

映画館は急遽その目的を大きく変えて、今では上映ではなく戦場音楽を奏でるオーケストラによる、たった1回きりの破壊と殺戮の三重奏コンサート会場になっていた。

演奏者は3名のみで、聴衆は殺されたばかりの新鮮な亡骸のみ。さららが赤く染まった鉄パイプを振り回せば付近に座った聴衆の半分しか残っていない頭が弾けとび、ぶよぶよした脳や頭蓋骨の骨片が竜巻のように飛び散る。

るるるが肉片のこびりついたH鋼を振り回せば血を吸い込んで染まった椅子が叩き壊され、座っていた聴衆ごと椅子が暴風雨に巻き込まれた藁のように路識目指して荒れ狂う。

そのチームワークは素晴らしく、るるるが打ち飛ばす椅子や聴衆は曲射や直射と緩急を織り交ぜる事でタイミングが単調になることがなく、更にそのタイミングの間に合わせてさららが鉄パイプを振り回しては距離を詰め椅子の迎撃を困難にさせる。そしてさららはタイミングをとらせないだけかと思えば、さららをブラインドにして曲射が山なりにさららを飛び越えて路識を狙い撃つ。

だがそんな悪魔的とも言えるチームワークに対しても路識は燃えることがなく、最初から一貫して椅子は避け鉄パイプは石突の刃で払うという行動だけを繰り返していた。

見る人間が見れば3人が3人とも 1人は圧倒的にやる気がないが 動きに余裕をもった様子見でしかないのがわかるだろう。

反撃を一切していない路識はもちろんのこと、宿木兄妹からしてみてもこの程度は路識のでかたを伺う為の曲芸でしかなく、本来ならるるるもこんな回りくどい遠距離戦なんてものはせずに、さららと共に接近戦でH鋼の重さをものともせずに舞うのが本来の戦法である。

ころは双方にとって本来の戦いかたとは違うものがあるが、この

戦法を取り続けた場合軍配は宿木兄妹に上がるだろう。何故ならばフェイントを織り込んでなお攻撃の速度を上げる宿木兄妹に対して、路識はただ愚直に避け続けるだけであり集中力が途切れでもすれば回避のタイミングは狂ってしまい、椅子に身体を強く叩きつけられ宙を舞うだろう。

だが、それな対して宿木兄妹はこれほどまでに繊細にして大胆なチームワークで路識に襲いかかつてはいるが、2人は肩に力も入っていない完全なリラックス状態だった。如何に高等なチームワークであったとしても2人は兄妹であり、自然体ですら想像を絶する連撃をこなす余裕があった。

「そろそろ死んで欲しいんだけど」

「無名の零崎とはいえ、もう少し齒ごたえがあるかと思っただけだ……それとも零崎ってこんなものなのかしら？」

戦闘に大きくアドバンテージを感じ始めたのか、宿木兄妹は路識を嘲るように侮るように饒舌に口を開く。だがそんな挑発を受けても路識は何ら感じることはないようで、今でも挑発を黙殺し寡黙に飛び交う椅子を避け続けていた。

まあ元々路識の気は長い方であり、この程度の挑発に乗っていたならば誓約をとっの昔に破り、今では真つ当な殺人鬼になって人殺しをしていただろう。人間としては救いのない生き方かもしれないが、零崎一賊としてはこれこそが正しい生き方だっただろう。

だがそんな安い挑発にも舞い上がる芳醇な血の薫りにも路識の心が動かされる事はなく、堅実に黙々と宿木兄妹の攻撃をかわし続けている。

「んで、お前達の次の手はまだ使わないのか？」

「ちつ…… 僕達を嘗めないで頂きたい」

気の長い路識と比較するのが酷だというくらいにららの気は短
いようで、向けられた挑発に乗りはしないものの回転のギアを階段
飛ばして上げ始めており、いまでは瞬きする間もないスピードで舞
い始めた。

既に常人には理解出来ない空間になったシアターは、もし足を踏
み入れたならば世にも珍しい椅子との交通渋滞に巻き込まれるか、
振り回された鉄パイプかH型钢に削り飛ばされるのが関の山か。
だが、そんな状況になろうと路識は歓喜するわけでも悪態をつくわ
けでもなく、ただただ無感情に迫りくる脅威をかわすだけであった。

戦闘が始まってから既に いや、やつと5分が経過した。 殺
しあっている本人たちにはまだまだ慣らし運転の領域を出ていない
が、これを表の人間が観ていたならば複雑に絡み合う攻撃の連鎖に
心を奪われ時間感覚をおおいに狂わせただろう。

だが、ここに居るのはプロのプレイヤーだけであり、今更緊張で
時間の感覚を失うような間抜けは1人もいない。 間断なき宿木兄
妹の連撃に顔色ひとつ変えない路識は、急に辺りを伺うようにくる
りと周囲を見回したかと思えばつまらなそうに「んだかなあ……
とりあえず寝てろ」と口にして凶悪な鞭であるダイスメーカーを軽
く振ると、先端の房の一端一端に壊されて吹き飛ばされていたシア
ターの椅子が巻き付くように幾つもくくりつけられ、鞭のスナップ
に合わせるように何十もの椅子が大質量をもって津波のように宿木
兄妹へと押し掛けた。

一瞬だけの攻守逆転。 雪崩こむ椅子の数々にららは鉄パイプ
で逸らしながら避け続け、るるるはここぞとばかりにギアをトッ
プまでかちあげてH型钢で殴り砕く。 自分達の連撃を止められた
にも関わらず、守勢に回った2人の口の端は歪められている。

そんな2人の心境を現すかのように、シアターにカツンと甲高い音が鳴り響く。

宿木らからは笑った。路識が守勢から攻勢に変わった時こそ路識が死ぬ時だと。

宿木るるるはにやけた。守りに入った路識は堅実であり、攻勢に入って守りを捨てた時こそ路識が死ぬ時だと。

宿木りりりは確信した。完璧なタイミングであり、自分の投鉈は確実に路識の額を撃ち抜いたと。

しかし、それがどうしたというのだろうか？ たかがこの程度の輩に奇襲を受けたくらいで零崎が死ぬだろうか？ 殺し名の序列3位とはその程度でしかないのだろうか？

「ぐあああ?!」

シアターに悲鳴が響いた。らららとるるはその声に驚き、路識を仕留めたりりりへと視線を向けた。そこには必殺のタイミングを図る為に戦闘に参加せず、ただただ路識の出方を見極めて殺意をもって路識を殺しきった筈のりりりが立っていた。ただし、腰から下は綺麗な立方体の細切れになった肉しか残っていなかったが。

「りりり!」

「りりり兄さん!」

足を失いバランスを崩し地に伏せ痛みにもがき苦しむさまを例えるならば、子供がイタズラ気分で半身を潰した芋虫が。痛覚があるのかは知らないが。地面をのたうち回っているようである。

りりりが地面を転がる度にじゃらじゃらと鉾が溢れて不細工な音楽を鳴らし、どくどくと斬られた大腿動脈から血飛沫を飛ばして歪なイルミネーションにし、ぎゃあぎゃあぎゃあと絶望以

外を聞き取れない美しい悲鳴がコーラスとなっていた。　るるはりりりが気になったのか路識が倒れている事すら忘れたかのようにH型鋼を捨ててりりりの元へ走り寄り、らららはりりりの怪我と取り乱したるるの現状に舌打ちしつつ鉄パイプを倒れて血塗れの路識に向け続けた。

「ぎゃあぎゃあ喚くな見苦しい」

「零崎……　路識！　死ななかつたのか」

地面に寝転がったままだった路識はだるそうに立ち上がると、血塗れになったスキンヘッドをがしがし掻くとH型鋼にも鉄パイプにも難しいであろう、額に小さな穴のあいた生首を拾ってらららに見せつけた。

「おいおい、この程度で零崎を殺すつもりだったのか？」

「最初に侮つたのは頭を下げて謝りますから死んで貰えませんか？」

らららにしてみればりりりの戦線復帰は難しいかもしれないが、るるだけでも早く戦線に復帰して欲しいので路識が攻め急がずに会話で時間を無駄に浪費してくれるのはありがたく、弟であるりりをこんな目にあわせてくれたのは忌々しいがららは口が腐る思いで路識に話しかける。

それに対する路識もここで時間を無駄に使うのは利敵行為だとわかってはいるが、自ら相手を殺さない路識の思惑とこの会話が合致した為に会話に興じていた。

「それにしても、我が弟ながらりりりは巧く隠れていたと思ったのですが、今思い返してみるとだいたい前から気付いていたんですか？」

身内竊屍ではないが実際にりりりは巧く隠れていたとららは思っている。朝からるると2人きりで路識を追跡し、路識が映画館に入ってからりりりを呼び出して合流し、襲撃方法の骨子はいつも通りららとるるるが陽動してりりりが討つと決まっていたが、ホラーを見に行ったならばと詳細を即興で決めて最後の最後までりりりの存在は隠し通したはずだったが、蓋を開けてみればこうも簡単に対応されてしまっていた。

タイミングも何もかもが十全で完璧だったりりりの投鉾は意図も容易く対応され、結果として残ったのはただの襲撃失敗どころか悲惨なりりりの現状のみ。怒りや驚愕がごちゃまぜになった感情が荒ぶるのを感じながらも、ららは少しでも路識の集中力を途切れさせ自分達に優位になるように……そしてりりりの怪我と取り乱したるるるを思いやるように路識の出方をうかがう。

「そりゃさ、間抜けでなきや気付く。3兄妹の誰がそうなのかは知らないが、誰かは夜目があまり利かないだろ？ 映画が終わればシアターは当然明るくなるが、その作業をする人間を殺したつてのに明るくなるのは他に誰かが居るって教えてるようなもんだ」

「そうは言うけど、作業をしてから殺したのかもしれないよ？」

自分の手の平に力強く爪を立てて握り、痛みで怒りの鎮静化を図る。確かに間抜けでなきや気付くだろう……。即興とはいえないこんな所でポ力をするとは自身の至らぬ知恵を呪うしかない。そんなららの内心など興味がない路識は、更に当然だと言わんばかりに「そもそも、お前達は3人揃ってビルから俺を観てただろ？」と言ったのを聞いて、らららとしては乾いた笑いしか出てこない。

確かに朝一にはりりりも含めた3人が揃っていた。ただビルの屋上から敵意もなく路識を見下ろしていただだけである。しかも、

しかもだ、太陽を背にしていたので路識からすれば逆光であり、下から見上げる形になる路識には見える筈がなかった。

「あまり零崎を嘗めない方がいい」

見えないという常識に対しての路識のその一言こそが、絶対に覆らない純然たる事実だった。

第5話

この場において主導権を握っているのは、間違いなく他者の血ではあるが全身血塗れ状態の零崎路識だというのは明らかにとって容認したくなくとも歴然たる事実だと理性は理解している。 理性は理解しているのだが、ららら自身にも『勾宮』の分家として培ってきた殺し屋としての矜持があり、弟であるりりをあんな目に合わせた路識を容易に認められる感情を持ち合わせていなかった。

現状は認めようがなく最悪であり、少ない語彙を総動員させなくともまさしく絶体絶命と言うべき状況だった。 いや、相手があの『生肉工場』である以上は命の危機とまでは性質上いかないが、それでもりりは即座に止血から輸血までこなさなければ死ぬだろう。

「まだやるのか？ 俺は零崎である事を疑われる程の平和主義者で、今すぐそこに落ちてるりりりだったかを拾って逃げるんだったなら見逃すぞ」

路識にとっては親切でしかない言葉だが、それを受けるららとしては腸が煮えくりかえる思いでその言葉を受け取る。 余裕しかない路識の言葉はそれを受けるららにとって、完全に嘗められ見くだされた憐憫としか聞こえない。

視界が真っ赤に染まりそうな程の激情が荒れ狂い、気迫だけで人間が死ぬならばこの部屋に誰かが迷いこんで一歩踏み込むだけで絶命するだろう。 それほどまでの怒気と殺気がシアターにばらまかれていた。

止めどなく溢れる思いをばらまいてはいたものの、らららの冷静な部分は路識の言葉に頷き狗のように這ってでもこの場から逃げ出すことを主張していて、激している部分もその意見には概ね同意している。

万全を期してすらこの体たらくであり、敵である路識が逃げていいというならばりりりの命を考えて撤退すべきである。撤退すべきであるが、そこまで卑しくとも生き残るべきだろうか？

元々このレベルでは零崎を殺して成り上がるう等とは夢の話だったのかもしれない。零崎の恐ろしさを体感した事を糧としてこの場を逃れ、後にリマッチするのが最も効率がいいのはわかっている。そこまで理性は本能を従えて理解に及びながらも、感情だけは最後の牙城とばかりに立ちふさがる。

「ダイスメーカー……貴方は僕達を嘗めきっているようだ。次こそは必ず絶対に殺します」

らららの中でまだ短い人生とはいえ、比肩すべきものは金輪際ないであろう大英断をしたと感じている。最後の牙城である感情を握り潰し、この場からの撤退を決断したのだ。

これで宿木家の再建からは大きく遠退き、りりりに関するケジメを路識に求める事は後回しになったのだ。らららにはお家の再建という尊い願いがあり、公としての宿木家長男と私としてのらららを使い分けるメンタルがあった。だからこそ、りりりの兄としてのらららではなく宿木家長男としての自分を優先し、この場からの撤退を決意させた。

そんな特殊な状況において、全員が全員納得できる形を模索する暇もなく下した撤退という結論に対し、全員が本当に納得できるだろうか？ましてや、りりりの怪我に取り乱し零崎憎しという思考に頭を汚染された少女に。

「この場は退きますからりりりをお願いしまするる……るる、る？」

そこは先程までと何も変わりがなかった。嵐が過ぎ去ったよう

にぐしゃぐしゃになったシアターも、血だるまになり痙攣しながらひゅーひゅーと呼吸を続けるりりりも、そしてららを親の仇を睨むように　いや、遠くでも近くでもない何かを曇ったガラス玉のような瞳で見つめるるるるだけ。

少し違うのはるるるが完全にキレており、そして己の獲物たるH型鋼を振り抜いているだけで、それに伴った結果としてららの左腕がもぎ飛ばされただけである。

「ぎっ?！」

無くなつた腕を認識した途端に爆発的な痛みが腕を苛み、全身を溶けんばかりの熱量と急激な出血による寒気が身体を襲う。

何が起きたのからららには理解できなかった。目の前に立っていた路識がダイスメーカーを振つたのは見えなかったが、零崎との格の違いを見せられた以上はもしかすると視認できない攻撃があつたのかもしれない。

宿木に生まれた者として、みなが養子に出て浮舟らららとして藤壺りりりとして朝顔るるるとして苗字を変えようと、らららはりりりもるるるも愛していた。共に闘い育ってきた。

宿木の家が『死色の真紅』とぶつかり潰えた際も、3人は養子に出ていた為に援護はできなかったが、その怒りを糧にしてお家の再建を誓いあつたはずである。だからこそ、らららは目を瞑り耳を押さえて踞りたかつた……　真実から目をそらしたかつた。

足元には細切れになった腕は落ちていない。　じゃあ、無くなつた左腕はどこにいったのか？

「逃げるなんて許しません……　りりり兄さんの苦痛は敵の血をもつて洗い流します」

るるるのガラス玉の目は誰も視ておらず、誰かを憎悪するのでは

なく 誰でも憎悪していた。振り回されたH型鋼にはよく知る袖をつけた腕がへばりついており、今もびちゃびちゃと血を垂れ流している。

見ての通り宿木るるはキレていた。敵味方の判別はなく、そこにあるのは自分か敵かという単純回路のみ。間合いに入りさえすれば誰でも敵として処理する魔神と化していたのだった。

「るるる？」

そこまでらららにはわかっていたが、それでも認められないものがある。3人は血を分けた兄妹であり、分家内で散り散りにはなつたが3人揃ってこそが最も強いと信じていた。

だからこそ、らららは自分の思考を外れたものを認めない。親愛するが故に盲目となり、誘蛾灯に引き寄せられるかのようにゆっくりとるるるの間合いを侵犯していく。

「全てに死を」

最後にらららが聞いたのはそれだけだった。

先程までのるるるのH型鋼捌きを暴風雨と例えたが、そうだとすれば今のるるるのH型鋼捌きを何と例えるべきだろうか？

ゴウと風切り音を鳴らして原型を留めていない椅子が舞い散らされ、ビュウと音を立てて観客の肉片が飛び交い、ガツンと音をあげて床のコンクリートが散りばめられる。

ベシヤと瑞々しい音を奏で半分決たらららの首が吹き荒れ、グチャと音を潰して更に分割されたりりりの上半身が宙を舞う。

その中心で踊り狂うのはH型鋼を振り回す宿木らららであり、全

身を赤く染め肉片や脳漿にまみれた姿はおぞましく路識よりも遙かに鬼らしかった。

「壮絶なものを見せてくれたな畜生」

飛び交う椅子の破片やコンクリートの礫は出来る限り『生肉工場』で逸らし、らららやりりりのような柔らかい人間は粉々にして無力化していく。

それにしても、るるるの体力は無尽蔵なのか？

今ではさっきまでの連撃で見せていた動きが遊びだというように、さつきとは雲泥の差があるまるで一人サイクロンだと笑い話ではなく思ってしまったような動きをしている。

「美しき兄妹愛かと思ってたが、何とも今となつては兄も塵に等しい扱いだな」

両者の足元には原型がなんだか解らないような赤い何かが散りばめられており、踏みつけられ踏みにじられているそれはダイスメーカーで細切れにされH型鋼で磨り潰され、そして無惨にも踏まれ続けた宿木兄妹兄2人の成れの果てである。

現にるるるは大きく踏み込むと気づかず2人の肉片を踏み潰し、その血肉を浴びても表情どころか顔色ひとつとっても変化させることはない。ただあるのは能面みたいな無表情と、その表情に負けず劣らない何も写さない空洞のような瞳だけである。

たぶんだが…… いや絶対にだが、こいつはなんで俺と殺り合ってるかすら覚えてないだろうし、下手したら殺り合っている自覚すらないのかもしれない。

まあ、だからと言って俺から退くことはない。路識には敵を逃がす努力はあるが、自身が敵から逃げ出すという選択肢は当然のようには持ち合わせていない。

ふと暴風圏内から飛び出し壁に埋め込まれた時計を見れば13時を回った所であり、さすがにもう疲れてきたのは否めない。基本的に路識の戦闘は長期戦に陥りやすく、おかげで体力には自信があるが頭のネジを飛ばして疲労を疲労と感じられない相手には部が悪い。

大人と少女の体力差を期待するには少女の武器が腕白すぎであり、それをいつも殺して振り回しているならば体力勝負を持ち掛けても負けないだろうが辛勝になるだろう。

「さてさて、もう少しばかり疲れたな。　殺しはしない……　生死はお前次第だ」

それを聞いてもるるの行動に変化はなく、H型鋼を振り回し薙ぎ払い叩きつける。　しかしながら、そこからの路識の動きは完全に変化していた。　先程までは無難に暴風圏ギリギリに留まり、絶滅を期したH型鋼を避け流し払い続け攻撃をいなし続けていた路識が、たった一步とはいえ自分からH型鋼の嵐に踏み込んだのだ。

H型鋼という長柄の武器に対してたった一步でしかないが、その一步をなしたのが裏世界の、更には殺し名の、更の更には零崎ともなれば長柄の間合などは散歩感覚で埋められてしまう。

その一步に理性を失したるるは無反応　ではなく、理性を亡くしても消えない本能と研鑽を持つて危険を感じとり、片足を上げて一步下がろうとして少し考え込む。　そもそも鞭なんてものは、武器の性質を考えれば遠心力を十分に発揮できる中長距離での戦闘を主眼に作られた物であり、わざわざ利点である間合いを潰して踏み込むなんてものは悪手でしかない。　もしかしたら石突に備えられた刃を狙っているのかもしれないが、それならばちゃん刃ごと敵を砕けばいいだけである。

脳髓を使わずに本能と脊髄のみで算出された答えに従い、下がる為に浮かしかけた右足を前に進めてこちらからも間合いを食い潰す。

間合いが近づけばH型鋼とはいえ遠心力を失い威力は減衰するだろうが、それを補ってあまりある質量があるので支障はない。

だからこそ、ここであるるは選択肢を誤った。誰かが言っていただろう。零崎を嘗めるなど。

ここ一番の一番、結びの一番において躓いて転ぶ何てことをやっただけ。

第6話

血の海とも言える地面が目の前に立ち塞がる
何故？

額を地面に叩きつけ視界は血にまみれ赤い何故？

何で私は急に転んだ
何故何故何故何故何故何故何故何故何故何故

何故何故何故何故何故何故何故何故何故何故
何故何故何故何故何故何故何故何故何故何か
しいおかしいおかしいおかしいおかしいおかし
おかしいおかしいおかしいおかしいあり得ない
あり得ないあり得ないあり得ないあり得ない
あり得ない。

転ぶなんてことはあり得ない。それこそ血の滲むような研鑽と血を流す実戦を多くこなし、そもそも遺伝子レベルからここぞで転ぶような作られかたをしてはいない。そうあれかしと作られ育てられ、そうあろうと作り育ってきたのだ。

転ぶだなんてあり得ない。敵はどうやら目の前に居るが追撃してきていないようなので、少し離れた所に落ちているH型鋼を立ち上がり様に元々持っていた筈の右手で取ろうと考えて ふと武器を手離した理由を思い返す。

如何に突発的な出来事とはいえ転んだくらいで武器を
生命線
を離したりはしない。

理由が無ければ武器を離さないならば、逆説的に考えれば武器を離す理由があつた筈だ。

「離す……理由？」

転んだら普通はどうする？
それは至極簡単な答えであり、普通ならば地面に手をつくだろう。

何かを持って転んだら普通はどうする？
これは可能性の話だし

かないが、地面に手をつく際に邪魔だと感じれば手離すだろう。

じゃあ、転んで手をつくのに邪魔だった武器であるH型鋼を敵前で投げ棄て、体の保護を優先して　優先して？

あれ？　おかしいな？

転んだ私は額を地面にぶつけたよ？　手をついたのに、もしかすると血で滑って失敗した？

そこでジワリと体が熱を持った気がした。　左足の腿から下の感覚がない……　これじゃ躓いて転ぶ事すら出来ない。　両腕の肩から先の感覚がない……　これじゃ手なんてつけない。

あれ？　おかしいな？

らら兄さんの体がぐちゃぐちゃになってる……　そういえば途中で誰かを殺したかも。　りりり兄さんの体が腰元しか残ってない……　そういえば地面と一緒に色々潰したかも。

ポケットから煙草を取り出した路識は、不特定多数の血によって白から赤に衣替えした結果湿気ってしまった事に気付いてイラつき、怒りに任せてまだ数本しか吸っていなかった箱を握り潰し地面へ投げつけ　シアター内でのポイ捨てはマナー違反だと更なる血を吸って煙草をポケットに戻した。

その時に見えたるるの瞳には理性の色が戻っており、精神が巡り巡って一回りしてきたのだとうかがわせる。　とはいえららは無償で今回の行幸を得られる筈もなく、代償として左足と両腕と兄を2人という高すぎるものを支払ってはいるが、そもそもとして零崎を相手取り本人が死なず五体満足から転落する程度は安すぎる代償だといえるだろう。

「心配するな、お前の兄を殺したのは俺じゃない」

そんななんの慰めにもならない言葉を吐き出しながら、今しがた

るると演じた大立ち回りについて考える。結果は明らかに路識の圧勝であり、相手は死体2つに重傷1に対して路識は疲れたくらいでしかない。

なんと言っても相手方の戦術骨子たる隠し玉は、それこそ戦闘が開幕する前からいのちにバレており、いつ来るかはわからないながらもいつか確実に来るとわかつている奇襲に恐怖はない。

出方をうかがいながらも奇襲を凌いでからというもの、特に路識としては何もしてはいないがるるによって戦力だったららと戦力未満のりりりを殺すという自滅が勝手に繰り広げられ、大きな仕事は最後にダイスメーカーを操ってるるの手足を解体したくらいだろう。

とは言ったものの、その手足を解体した事すら難しい事はしていない。これはただ武器に精通している人間だからこそ陥りやすい盲点を突いたもので、ダイスメーカーをただの鞭だなんて不便極まりないものとして捉えた敵にこそ効果は絶大である。

そもそも鞭は刃物ではないから触れるだけで傷はつけられず、鈍器ではないから鞭の質量を凶器にすることもできない打撃武器だ。しかも攻撃パターンは腕や足に絡ませる事もできるが、基本的な型はあくまで横薙ぎか振りおろしだけしかなく、利点は超重の鈍器よりトリッキーな動きができ刃物より遠巻きに攻撃できる程度でしかない。

そう、普通の鞭ならばそうである。だが、この鞭は　ダイスメーカーは零崎路識の代名詞とも言うべき凶悪な武器であり、普通の鞭とは一線を画していると言えた。

思い出して見てほしい。シアター内において路識のダイスメーカーは、本来の鞭らしく打撃をおこなっただろうか？

今は赤く染めあげられたダイスメーカーの先にある房は、1本1本の直径が0.1mmにも満たない柔性と剛性を兼ね備えた特殊な糸で構成されていて、さらにそこへ切れ味を求め細かなダイヤモンド粒子をまぶすことで斬り払いを主眼においてダイスメーカーは作

られている。だからこそただの鞭ではあり得ない軌道を使うことができた。

路識が最後の1合を交わす前に、るるの少し前にダイスメーカーの糸を蜘蛛の巣状に張り巡らせ、それをるるが踏んだ瞬間にダイスメーカーを上へ振り上げた。振り上げられたダイスメーカーに引かれて糸は複雑に絡み合い左足を細切れにし、左足を失って地面に倒れるタイミングを狙いつつ両腕も粉々にしてやった。

鞭使いと相対したならば気をつけるのは使い手の腕の軌道と関係なく頭上や後背から襲ってくる鞭の軌道であり、どのような武器とどういふ足元に注意を要する物は少ない。その盲点を突いてしまえば、相手はなすすべもなく手足を失うのは必定というのが路識の持論である。

「んつたく、面倒かけさせやがって」

煙草がお釈迦になったせいか口調が自分でも刺々しくなったと感じるが、そもそも前提として敵を労う必要はないわけだから問題はない。

「んじゃ、俺は帰るから生き残るなり犬死するなり好きにしてくれ」

まだ生きているるるを踏まないように気をつけながらも、他の死体は床と等しいのか歩幅を調整することなく何人もの死体を踏みしめてシアターの出口へ向かって行く。足早に見えるのは地獄の釜より無惨なシアター内から急いで逃げたいからではなく、さっさと煙草を一服したいが為である。

「ダイスメーカーさん」

「んあ？」

愛煙家というよりは中毒者に近い路識の脳内を紫煙が支配しかけていた時、急に後ろからるるの冷静な声をかけられて怪訝そうに立ち止まり、名前を呼ばれたからにはいったいどうしたんだと振り返る。振り返った先では未だに いや、当然のように片足しか残っていないるるが地面に伏せており、理性の残った顔をこちらに向けていた。

「私は貴方を理由に死ねませし、当然生き恥も晒せません。ふう…… 兄を殺した私には犬死にも上等過ぎますからね さようなら」

「さようなら」

年相応のかわいい笑顔でそういい、るるは苦痛を堪えながらも背筋に力を入れて弓反りに背を反らすと、額を床に落ちて棘を向けて立っている鉾に力強く叩きつけて絶命してしまった。

まあ生きるのも死ぬのも選択は自由であり、殺しは禁物だが自殺には寛容で死を選ぶならばその意志をわざわざ止めたりせずに尊重する。

「んってか、ここの殺しは俺のせいになるのか？」

路識は誰一人殺していないわけだが、結果だけをみれば映画館の中に居た人間は塵殺されており、そこから血塗れながら五体満足の路識だけが出てくるわけである。たとえばの有名なミステリー作家であるコナン？ドイルがこの場をみてどんなトリックを考えたとしても、シャーロック？ホームズを出すことなく助手のワトソン君だけで解決してしまうだろう。

それほどまでにわかりやすい現場であり、それほどまでに誤解を

受けやすい状況だと言える。　じゃあその名助手であるワトソン君に路識が《障害以外は殺さない》という誓約をおった殺人鬼だと伝えたらどうだろうか？

この前提があれば路識が映画館のシアター内で少なくとも殺しを行なっていないというのがわかってもらえるが、如何に誓約だなんだと言っても路識は殺人鬼でありその時点で官憲につき出されるのは必定である。

何が言いたいかというと、路識がダイスメーカーとして有名だからとはいえ、死体の山から殺人鬼が出てくれば犯人の謗りは免れないのである。　こんな時こそ名探偵の出番といたいのが、どんな名探偵でも証人は皆殺しで真犯人も全滅した事件は無実の殺人鬼を犯人と断じるだろう。

零崎に対する世間の評価とはそんなものであり、むしろ世間的には殺しをしない路識の方がこんな大量殺人より断然ミステリーだったのだ。

「んむう……　本当に面倒だな」

このまま帰れば片識はキレる可能性が高い。　何故ならば昨日あれだけ優識や正義に多発する殺しを諷めたばかりであり、そこにこんな大量殺人だなんて問題を放り込んだ日には、それこそ火薬庫で楽しく火遊びをするのに等しいだろう。　その火遊びの帰結は当然大爆発であり、片識はキレて路識を……　路識を

「ん？　むしろ誉めそうだな」

頭の中に浮かんだ片識は『このタイミングで面倒を起こしやがって』と、ストレスから滂沱の血涙を流しながらも誓約をやめて零崎らしくなった路識を抱擁で迎えるだろう。　だからといってそれはそれで路識としては片識が鬱陶しいので、結局嫌でも説明責任を果

たさないとならないようだ。

まあとにかく喜か怒かはわからないが、どちらかに振れきった片識と相對した拳句、なんとか説明して説き伏せなきゃならないという大仕事がこれから待ち構えていて、どちらも言うまでもなく面倒なことに変わりはない。

「んにしても、他の宿木は来ないだろうな？」

路識は参加しないだろうが、殺し名としての仇討ちは零崎のお家芸である。『死色の真紅』に対する仇討ちなら 勝ち負け云々はおいて 推奨したいが、路識を仇として宿木の他の養子が来たら間抜けであると言えない。

まあとにかく今は新しい煙草を吸って、シャワーも浴びて全身に付着した血肉を流したい。

第7話

とりあえず、盗人さながらに映画館のスタッフルームに入り込んだ路識は、部屋を物色し目的であるロッカーを探していた。血塗れでは人混みに出るに出られず、シアター内の死体はどれもかしくも血塗れの服を着ているので使えず、ロッカーならば血塗れを回避した服が入っていると踏んでいるのだ。

スタッフルーム内には扉に更衣室と書かれたプレート飾られたものがあり、そこに入れば予定通りロッカーが並んでいた。男物の服を求めて錠前を破壊しながら探索する。ちなみに、顔は頭ごと布巾で拭いたので血液も脳漿も付着してはいないが、おかげさまで路識のトレードマークともいえる筋隈も消えてしまっていた。

「んー…… これでいいか」

少しがたいのいい路識には小さいが、男物で一番大きかった服をとるとスーツを脱いで目星をつけていた鞆に放り込み、手に入れた服を着こんで着替える。鞆に放り込むわけとしては、いくら血塗れのスーツとはいえこれはブランド物で結構なお値打ちのスーツなので、これを気に入っている路識としてはこの程度の理由で捨てたくはないのだ。

それにしても、よれよれのスーツよりは断然今風で若々しい服装にチェンジした路識だが、それでもがたいといい顔つきといいヤクザの風格が消えていない。本人としては怖い顔をどうにかする為に、それこそユーモラスとして顔に筋隈を入れているわけなんだが、あってもなくても威圧感に変化はない。というかむしろ、筋隈が顔に描かれていた方が普通は関わりたくない。

そんなちよつとばかりずれた考え方を持っている路識だが、着替えを済ませてから羽織った上着のポケットの膨らみを取り出してみ

ると、そこには財布が入っていた。中身を確認するために開けてみれば、そこには千円札が3枚と小銭、そして映画館の近くにあるサウナの優待券が入っているのを見つけてしまった。

「んつと、このサウナは家に帰るより近いし、さつさとさっぱりしてきちゃうか」

布巾で拭きはしたが早くシャワーを浴びたかった路識は、優待券を渡りに舟とばかりにサウナへと一路足を向けることにした。この選択肢をいくら恨んでも得られるものはなく、いくら願っても変わることはない。

今日という日に路識が失敗した事は2つある。1つは朝一に根城であるオフィスビルから出てしまい、そのせいで宿木兄妹の標的にされてしまったこと。そして、もう1つは急いで家に戻り説明をしなかったことである。

シャワーを浴びて染み付いた死臭を洗い流し、熱いサウナで汗水をながし、そして煙草を1箱吸いきってからオフィスビルに帰ってきた。そこまではいい……そこまではいいんだ。エレベーターを降りて玄関にはいり、リビングへの扉を開いた瞬間に、そこには異界が広がっていた。

「おめでとう路識！」

「おめでとつございます路兄！」

「……………は？」

入ってすぐに見えたのは満開の笑顔で拍手する片識と正識、包帯ごと血塗れのボロ雑巾になっている優識の3人と、テーブルに置かれたどでかいケーキと、そのテーブルからはみ出さんばかりに置かれた寿司やステーキやら七面鳥の丸焼きやらの豪華絢爛な料理たち。はて、今日は盆でも正月でもましてやクリスマスでもない。それこそ自分あまり物覚えがいいとは思っていなかったが、誰の誕生日でもない筈である。全く祝祭とは無縁など平日に、何故俺はこんな風に迎えられるんだろうか？

「えっと、今日は何の日だっけ？」

「路兄の口調が壊れるくらい喜んで貰えれば幸いです！」

「いや、だから今日は何の記念日だっけ聞いてるんだけど？」

全く心当たりはないが、どうにも言い方としては俺に関係しているのは確実だといえる。まあだからと言って心当たりがない事にはかわらない。

「俺達家賊は路識が真つ当な殺人鬼に戻るのは大歓迎だよ！」

「真つ当な殺人鬼？」

「映画館の話は聞きましたよ！中に居た老若男女問わずに零崎し尽くしたそうじゃないですか！」

「は？零崎し尽くした？」

「俺としては少しタイミングに苦言をていしたいけど、いつも誓約をもって零崎をしていなかった路識ならいつでも構わないよ」

気持ち悪いくらいに純粋な笑顔を向けて話しかけてくる2人が怖くなり、視線を横にずらせば先程まで死んでいたが復活した優識がまるで生まれただての仔鹿のように両足を震えさせながら立ち上がっていた。

「き、効いたぜ兄貴……　　って、路識の兄貴も帰って来てたんだ」

「た、ただいま。　その、何で血塗れなんだ？」

「俺と正識が昨日兄貴に零崎のし過ぎを理由にボコられて、今日は路識の兄貴が零崎三昧だつてのにキレるところか、豪華な飯まで用意して宴会ムードなのはどうよ？　　って言ったら兄貴に」

唇を尖らせながら「不公平じゃね？」と言っている優識を尻目に、路識の中では恐ろしい結論が導き出されていた。　　ここまでくれば可能性という次元の問題ですらなく、確実に……　　確実に真実がねじ曲がって伝搬している。　　映画館での大量殺人犯は殺人鬼である零崎路識だと出回ってしまっている！

「さあ、そんな事より座って座って路識。　今日は記念日だからね、晩御飯は奮発しちゃったよ！」

笑顔の片識に導かれるように背中を正識に押され、俺はいつも座っている場所へと移動して座る。　　正面にはニコニコ笑顔の片識が座り、左には片識に負けず劣らず笑顔が輝いている正識と、口では何だかんだと言いながらもどこか誇らしげに口の端を歪ませる優識が座している。

話を聞いて総合するかぎり、この祝宴は路識が誓約を破棄して零崎をした事に起因しているようだが、ちょっと待って欲しい。　　そ

の前提である誓約は未だに遵守しており、今回の件も路識は頭から尻まで誰1人殺してはいない。

というより、死体を見れば路識が犯人じゃないことくらいわかる筈であり、ここまで情報が早いくせに何で誰が殺したかっていう重要な部分を間違えているんだ？

「んー…… ちょっと聞きたいんだけど、どうにも情報が早くない？」

「それはね、俺が優識と正識の尻拭いに出かけてたら、路識が映画館にいた人間を全て零崎したって連絡が入ったんだよ」

そう言つて片識は苦笑しつつ、「タイミングはバッチリだったねえ」と漏らし、意味深な笑みを俺にむけると「まあ、おかげでネチネチと嫌味を言われたんだけどね」と繋げた。

さて、それにしてもこれは何の罰ゲームだろうか？

もう何度目にもなるが、そもそも前提条件として路識は誰も殺しておらず、こんな喜色満面な3人の間違いは完全に完膚なきまでに見間違いから始まって、完全無欠に検討違いで勘違いである。

ならば俺はどうしないとならない？ そう、例えばそれがどんな結果を呼び起こすとしても、そんな勘違いは解消しないとならない。

「んつと、あー…… その、言いたい事があーそうだ路兄、今度一緒に零崎しに行きましょうよ」るん「あっ、だったら俺も連れてってくれよ路識の兄貴」だが」

素敵な笑顔で発言を被せてくる正識と、抜け駆けは許さんとはかりに話しに乗ってくる優識。 何でこいつらは真実を言い出し難い雰囲気を作るんだ？ 事実を知った上で俺をはめて楽しんでるのか？

「それにしても、突然だけど嬉しいよ路識。 やつと…… やつと
トラウマを乗り越えてくれたんだね」

「っ、片識！」

和やかな雰囲気のリビングを貫く路識の怒声。 そこに居るのは
先程までの困ったかのような表情を消し去り、ただただ歯を喰いし
ばりながらも怒りのみを瞳に灯し、豹変に困惑した優識と正識を無
視して片識を睨み付ける路識がいた。

そんな豹変に優識と正識は首を傾げながらも、2人はアイコンタ
クトで『トラウマ』について考えるが何もわからず、片識は聞いて
いた話との齟齬にかなり困惑している。

「今回の一件について、俺は誰も殺しちゃいない！」

全てを振り払うようにそう叫んだ路識は、それ以上は何も口を開
かず立ち上がると足早に外へ行ってしまった。リビングに残され
たのは初めて感情を剥き出しにして荒げたのをみて純然に驚いた正
識と、今の会話のどこに地雷があったのか悩む優識。そして、路
識が最後に言った一言を聞いて真実を理解し、今の失言を悔やむ片
識だけだった。

完全に予想外で予定外…… いや、自分自身も何度も考えたはず
だ。 あの路識が本当に誓約を捨て去り、トラウマを乗り越えて零
崎を行ったのかを。

何の前触れすらなく、自身の内に禁忌として埋め込んだ絶望を飲
み下したのかと。

「えっと、路兄はどうして怒っちゃったの？」

「どうにも今は祝いの席であって、路識の兄貴がキレるような場面

にや思えなかつたんだが？」

正識からは不安そうな視線で、優識からは疑問と好奇の視線が自分を貫いているのがわかる。

「トラウマって路兄に何があつたの？」

「俺達は家賊だろ？　今更隠しっこはなしだよな」

2人の顔にはしつかりと『家賊なら言え』と書かれており、その根底にある心配する想いが滲み出ているのは重々理解できる。理解はできるが、家賊にも伝えられない　否、零崎一賊だからこそ伝えられない事実もある。

これは既に零崎路識という点の問題ではなく、零崎路識と零崎片識という線の問題ですらなく、もはや裏世界の殺し名三位である零崎一賊全てを面として巻き込んだタブーだと言えた。暴力を司る裏世界にとっては茶飯事とまではいかないものの、他の殺し名や呪い名にとっては起こっても少々の失点にしかないが、これはこれと零崎一賊にとっては根幹にも関わる大事になりかねない。

それだけ危険なことの為に零崎路識について知っている者は口を閉ざし、秘密主義を貫き続けた。この方針は意外と功を奏し、4年間を経てこれを知っている者が元々少ないのに加え他所の殺し名より人員の回転が早い零崎だけに、既にこれを知りうるのは年長者数名と現場に居合わせた片識、そして本人だけとなっていた。

第8話

零崎路識には様々な秘密がある。

それは知らぬ者には細事すら漏れ聞こえさせず、知っている者は墓まで黙りを決め込まなければならぬものである。

それほどまでに重大な禁忌を路識は犯しており、周囲からは過保護と謳われるこの片識でさえ、いかな家賊の願いであろうと秘密は溢さず墓まで抱いていくつもりである。

テーブルに残された山盛りの料理にため息をはきつつ、静かに立ち上がると2人には料理が冷める前に食べていてくれと言が残し、片識自身も路識の後を追うようにオフィスビルから飛び出した。

最初にトラウマを挟った罪悪感に加え、自分の気持ちの整理や地雷を踏み抜いた手前路識の精神状態を鑑みてすぐに追いかけるか悩み、追いかけると決めてから出るまでに時間をかけすぎ、オフィスビルから出た時には路識の影も形もなくなっており、そこには会社帰りのサラリーマンや中高生でゴったがえす通りしか残っていなかった。

「……………見失っちゃったねえ」

路識を見失った片識は自然と歯を喰いしぼり、立ち止まる自分を怪訝そうにみる通行人を無視して周囲を睨む。

決断に手間取ってしまい、偶然路識を見失ってしまった。

そう、偶然だ。

だからこそ、片識の冷静な部分は自分自身に問いかけた。

本当に偶然か？

「俺は路識を許してるんだ。 いや、許したんだ。 否、許すんだ」

冷静な部分が強く問い詰めてくるのは、本当に路識の精神状態を鑑みて悩んだのか？ 胸の奥に燻ったあの日の記憶が枷となり、弟である路識を追いかけるのを妨げたのではないか？

あれはしょうがない事故だった筈だ。誰も悪くない…… あえて”悪”を決めつけるならば自分が”悪”である筈だった。

そして悪である自分は贖罪として死んだ錐識から家長を譲られ零崎路識の兄となり、その言を守る為に路識と未だに生活していたんだ。だからこそ路識は今でも焼け焦がれるような贖罪に悩まされ続け、殺人鬼集団である零崎一賊としては欠陥としか言いようがない『殺人恐怖症』におちいり、あれ以来未だにただの1人たりとも殺していないはずである。

殺人をしない殺人鬼ではなく、路識は殺人ができない殺人鬼なのである。これはゴルゴダの丘を登るキリストより惨めであり、赤熱した鉄の靴を履かされた白雪姫の母より陰惨な路識の贖罪だった。『我思ふ故に我在り』という言葉があるが、殺人鬼ならば『我殺す故に我在り』となるだろう。じゃあ殺人鬼が殺さなかったならば、そこには何が在る？

この話は片識が零崎一賊となって3年目のこと、これは今から5年前の話である。

この日は片識にとって生涯消し去る事の出来ない悪夢にして、自身と路識を隔てる壁を生んだその日である。

「……またやつちゃった」

手にした血塗れの有刺鉄線を睨みながら、周囲に転がった五体不満足の死体を見てため息が自然と出てくる。 落ちている手足や首

を数えるかぎり、どうにも零崎している間にも増援があつたのか、片識が最初に零崎を始めた時の人数より死体の数が多かった。

散乱した死体は所謂ごつい兄ちゃんたちで構成されていて、長ドスや拳銃の残骸も散乱しているところからして当然彼等は真つ当な職業なんてものではなく、時には不動産を営業し時には風俗を営業し時には薬物の営業もする自由業 端的に言えばヤクザだった。

どうでもいいからあまり聞いていなかったが、覚えてるかぎりでは片識が偶々路地裏に入ればそこで眉間を撃ち抜かれてる男が射殺される瞬間を見てしまい、すつたもんだで零崎を開始して皆殺しと相成つたわけである。

「どこの組の奴だ？」

比較的綺麗だった死体の胸についたバツチを奪い、まじまじとそれを見れば最近新鋭でいけいけの紀伊組のバツチだった。 以前はパツとしない組だったが、組長が病に倒れて後を継いだ組長が今の勢いを作ったと言われ、小さいながらもどんな時でも退かないいけいけの組らしかった。

まあ、そんな新鋭の組も今日で終わりになる。

長ドスや拳銃をもつてすら掠り傷ひとつつけられていないが、偶々とはいえこうも真つ正面から零崎片識に ひいては零崎一賊に武器をとってしまったならば、片識がすべき仕事は敵の殲滅である。 この程度なら見逃しても構わないが、だからといってこれを見逃すほどの予定が片識にはなく、ていのいい暇潰しになればいいなと思っていた。

と、そんな時に片識の携帯が着信を知らせ音楽をかき鳴らす。

その音楽を聞いた瞬間に片識の感情は喜に塗り潰され、急いで携帯を耳にあてた。

『いま買い物に来てるんだけど、片識は何が食べたいのか聞きたく

てねえ』

「え、えっと、兄さんの和食が食べたいな！」

『……最近和食ばかり作ってる気がするんだけどねえ』

「そ、そうかな？ でも僕は兄さんの和食が大好きだよ！」

僕の大好きな兄さん　零崎錐識は殺人鬼で和食の達人である。
兄さんの作る和食はどんなちやちな料理すら贅沢に変えてしまい、
兄さんの作る洋食はどんなちやちな料理すら地獄に変えてしまった。
どうして兄さんの料理は和食と洋食でこんなに極端なんだろう……
って、兄さんには伝えとかなきゃ。

「……兄さんあのね、今日僕は少し帰るのが遅くなるから」

『どうさたのかねえ？』

少し心配そうな兄さんの声に、僕は恥ずかしながら嬉しくなってしまう。　だけど僕達は家賊として2人で生活している以上、遅れるならこうやって連絡するのが常識だと思ってる。

「僕はちよつと紀伊組に行つて来るから」

『紀伊組へ？』

「うん。　路地裏でその構成員にいちやもんつけられて零崎したんだけど、どうせだから紀伊組を纏めて殺っちゃおうと思って」

『わかった。　気をつけてねえ』

「ばいばい兄さん！」

通話を切って軽くスキップをすれば、足元の血溜まりがぴしゃりと跳ねて未だに死体だらけの路地裏に居る事を思い出し、そそくさと目的地へ向かう。 ゆっくりじっくり零崎しようかと思っていたけど、兄さんの心配を少しでも減らす為に早く零崎して帰ろうとおもう。

あの路地裏から曲がって曲がって真っ直ぐすすみ、そしてもう一度曲がればもう目的地が見えてくる。 そこにあるのは4階建のエレベーターも無い小さなビルで、ここの2階に紀伊組が事務所を構えているはずである。

いくらいけいけのヤクザとはいえ、ヤクザごときが殺し名にかなうはずもないと片識は事前調査は一切おこなわず、階段で態々2階の正面口に立って予想外の扉に驚く。 立て付けには年代を感じる木の扉だが、カード読み込み式の電子ロックが施されていた。

「鍵だけハイテクだね…… でも、零崎には関係ない」

ポケットから輪のようにして纏めておいた有刺鉄線、その名も『徹底鋼線』を取り出して一端に分銅が付いている方を振り回し、扉に向けて思い切り横薙ぎに振り回す。 表の世界の住人が見れば片識が素振りをしている風にしかみえないが、そんなことは零崎に限らず裏世界ではありえない。

まるでバターでも斬るかのように徹底鋼線は扉をスライスし、今では扉は跡形もなくなり扉だった木片を残すのみである。

「たのもーう」

事務所の中は鉄製の机が幾つも並びオフィスのようでありながら、まったくサラリーマンらしくない格好や眼光をした男が何人も座っていて、急に扉が切り刻まれたかと思えば事務所に侵入してきた片識に困惑しているようだった。

電子ロックが不法侵入を探知して喧しく唸り、誰かの香水かはわからないが少し室内は甘ったるい香りが支配していて不愉快なので、錐識の為でもあるが自分の為に早く皆殺しにしようと心に誓う。

「それじゃあ急で悪いけど、零崎を開始させてもらおうよ」

まずは手始めに徹底鋼線を横薙ぎに振り回す。そうすれば鉄筋コンクリートの壁も鉄の机も抵抗なくスライスし、侵入した僕にいきり立っていた筋肉達磨の体を3人分ほど上下に分けてやった。

ぐちゃりと2つに分割された死体をみて事務所に絶叫がっんざぎ、素手じゃ駄目だと理解したのか外の連中より更にゴツイ自動小銃やらが僕を照準する。人を殺す為だけに造られた自動小銃と、人の足止めをする為だけに造られた有刺鉄線との異種格闘技。まあ、その程度のハンディキャップ程度じゃ無いに等しいけどさ。

机の下に身を隠せば間断ない射撃が周辺を襲うが、身を隠しながら移動する僕には未だに当てられていない。こちらも反撃とばかりに机の下から徹底鋼線を放り投げ、相手の足首に絡ませては引き摺り倒してもう一投……こめかみにヒットして分銅が頭にめり込む。

かと思えば相手の装填の間について机から飛び出し、横薙ぎにスライスすればいつの間にか事務所に立っているのは僕だけになっていたね呆氣ない。

「くそう……殺してやる……」

「俺の体が…… 誰か俺の腸を戻してくれ……」

まさに事務所は魑魅魍魎が跋扈するような怨嗟がとりまき、死臭があふれる地獄と化していた。赤い赤い血を止めどなくあふれさせ、赤とは真逆の真っ青な顔をして必死に体内からこぼれた内蔵を押し戻そうとし、両手を真っ赤にして必死に分割された下半分から内蔵を抜き出しては上半身に詰め替える者や、引き摺り倒した際に強く引きすぎて足首をねじ斬ってしまった者が、眉間からこぼれた脳みそを懸命に床から広い集めている。

あちこちで地獄が地獄をしている素敵空間。芳しい血の芳醇な香りに少しずつ息が荒くなるが、今は気分がいいからゆっくり組長を殺すという。

事務所の奥には扉があり、そこには人の気配があるからそこが組長の部屋だろう。それにしても、カチコミがあつたっていうのに部屋から出てこないなんて豪胆なのか小心なのか…… けどどちらにしても零崎しちゃうんだから性格なんて関係ないかな？

扉に手をかけ開けようとしたその時、僕の足首が掴まれた。

「待て…… 親父には手を…… 出させん……」

「うるさいよ」

徹底鋼線がこめかみに孔をあけた頭を上下にスライスし、分銅に挟まれた脳みそがうどん玉のようにこぼれ落ちた。

小さくため息を吐いて怨嗟に背を押され片識は扉を開く。 今殺した者が事務所で最初の死者だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6967/>

零崎路識の人間嗜好

2010年10月11日05時47分発行